

令和4年度第2回秋田県立美術館運営協議会(書面開催)要旨

1 書面開催について

書面開催の方法は、報告・協議事項について、協議会委員から意見を徴収して集約したものに、秋田県立美術館指定管理者(公益財団法人平野政吉美術財団)の回答及び考えを付して会議録とする。

2 書面提出委員

山崎 宗雄
長瀬 達也
加藤 隆子
藤田 亜樹子
ジョージ・ジャービス

3 報告・協議事項及び意見を求める項目

(1) 報告事項

- ① 令和4年度 事業概要について
- ② 令和2～4年度 月別入館者数
- ③ 令和2～4年度 展覧会別入場者数
- ④ 令和2～4年度 県民ギャラリー入場者数
- ⑤ 令和2～4年度 セカンドスクールの利用者数
- ⑥ 令和4年度ミュージアム活性化事業(特別展)外部評価集計表
- ⑦ 令和4年度ミュージアム活性化事業(特別展)来場者アンケート集計表
- ⑧ 令和4年度ミュージアム活性化事業(特別展)分析

(2) 協議事項及び意見を求める項目

- ① 令和4年度 秋田県立美術館の事業について
 - ・ 展覧会事業(特別展4本)について
 - ・ 展覧会事業(企画展2本)について
 - ・ 教育普及事業(セカンドスクール、各種教室等)について
- ② 県民ギャラリーの利用状況(利用者数、利用促進のための御提案など)について
- ③ その他

4 委員からの御意見・御提言等並びに秋田県立美術館指定管理者の回答

① 令和4年度秋田県立美術館の事業について

- ・ **展覧会事業(特別展「川瀬巴水」「透明標本」「藤田嗣治 子どもへのまなざし」「岸田劉生」)**について

委員からの御意見・御提言等	指定管理者の回答
<p>○「川瀬巴水展」は、共催のAABが開局30周年記念事業として力を入れたことが功を奏したと思う。日本画出身である川瀬の、デッサン力の確かさと同時に、日本の彫り師・摺師の技術力の高さを堪能できた。</p> <p>「透明標本展」は、夏休みの小中学生と、その家族にとっては最適な企画だった。写真撮影が許されていたため、SNSで拡散され、広告効果が大きかったと思う。</p> <p>「子どもへのまなざし展」では、さすがにポーラ美術館のコレクションは見事だと感じた。斎藤真一の資料は、読めば意味はわかるのだが、展示としては唐突感もあった。</p> <p>「岸田劉生展」では、様々な“麗子像”を見せてもらい、これまで知らなかった岸田劉生の画業を知ることができた。</p>	<ul style="list-style-type: none">● 今後も、美術館の基本方針や事業のねらいを念頭におきながら、県内企業との共催をはじめ、多様な主体との連携・協力を深めてまいりたい。● 展示資料の作成については、展覧会のテーマに鑑み、その資料を提示する意図を明確にするよう努めたい。● 「透明標本展」のような家族連れ向け展覧会を行う際には、写真撮影も意識した展示を検討したい。

○「川瀬巴水展」は、総体的には新版画というジャンルへの意欲的な展示であったと思う。巴水の持ち味ともいえる浮世絵版画からつながる作品の美しさがよく伝わっていた。秋田の風景を題材とした作品もあったことから県民には親しみやすい内容でもあった。「透明標本展」は、夏休み期間、かつ博物学的な内容の展示でもあったことから、家族連れや通常の美術愛好者以外の入館者が多かったと思われる。年齢層も10代から30代の来館が多く、その中でも女性の率が高かったとの分析もあり、「綺麗なものを観たい」というニーズが結果となっている。ライティングによって表出された着色標本の美しい未知の世界は、来館者アンケートにもあるように満足度の高い内容であった。

「子どもへのまなざし展」は、アンケートでも県外来館者数が多く、期待値も高かったと思われる。フジタありきの展示であったが、「なぜ子どもや職人か」という部分など、晩年の創作と心的部分へのアプローチ、あり方への検証などが少し弱かったと思う。藤田嗣治への引き続きの意欲的な取り組みを期待する。

「岸田劉生展」は、これまで何度か眼にしてきた展示であったが、意外に県外来館者も多く、劉生のネームバリューを再認識させられた。「麗子像」の内容がいまひとつという意見もあったが、装丁や晩年の南画など、劉生の画業の流れと多様性を感じることができた。

○今年度の特別展4本は、企画及び運営が共に成功であったと考えられる。来場者数の目標を概ね達成したことだけでなく、秋田県民の嗜好に合った「川瀬巴水展」や、秋田県民の美術の概念を広げた「透明標本展」を開催したこと、「子どもへのまなざし展」で、藤田嗣治が描いた子どもの絵に焦点を当て、藤田の新しい魅力を紹介したことなどが主な理由である。秋田県民の嗜好に合う表現と、これまでの美術概念にとらわれない創造的な視点の両方を今後の企画でも追求してほしいと考えている。

○特別展に外部講師を招く企画が、今後もあると良い。

○「川瀬巴水展」は、素晴らしく興味深い展示だった。多数の木版画を細部まで見られる機会となり、色々な技法を分析し、よい勉強の機会となった。渡邊木版と川瀬の説明があったが、もう少し“摺師”の役割について解説があると良い。

「透明標本展」で、たくさん子どもたちが美術館を訪れたのは嬉しいことである。子どもたちが気軽に美術館を訪れる習慣ができるとうれしい。

「子どもへのまなざし展」では、ポーラの店舗に貼ったポスターをきっかけとして来館したというアンケート結果があった。そう考えると広報物の設置場所も柔軟に考えるべきか。

「岸田劉生展」の来場者数が、予想よりも少なかったことは残念である。冬の寒さとコロナの影響か。

●作家・作品と秋田の間にゆかりがあると、来館者の反応が大きかった。秋田ならではの展示については今後も意識していきたい。

●美術館と聞くと、ある程度の知識や教養が必要だと思われがちだが「透明標本展」のような幅広い世代が直感的に楽しめるものをアピールして、誰にでも身近なものであると認識してもらえるよう、バランス良く企画を立ててまいりたい。

●藤田作品の紹介は、来場者の期待も高いことから、今後もより良い展示ができるよう努めてまいりたい。

●岸田劉生の麗子像は画業を通じて数多く制作されており、その変遷を辿ることのできる今回の展示は代表作を鑑賞するときとは違う見方を紹介できたのではないかと考えている。

●今後も魅力的で良質な展覧会の企画により、美術の奥深さ、幅広さを県民に紹介していきたいと考えている。

●今後も継続していく予定である。

●「川瀬巴水展」では、画家と版元の関係が一つのテーマとなっており、当時の新版画の流れも紹介する展示であった。版画制作にかかわる職人たちについては詳しく紹介できなかったが、展示方法を含め今後に生かしていきたい。

●移転開館から10年になろうとしているが、冬場の特別展はどうしても来場者数が落ちる傾向にある。特別展の開催時期と、それに伴う年間の実施本数については、検討していくべき課題である。

・ 展覧会事業(企画展「藤田嗣治 パリへの郷愁」「藤田嗣治が愛したのものたち」)について

○「パリへの郷愁」では、油彩の《五人女》と、そのエスキースとも言える鉛筆画の《裸婦立像》が並んで展示されていたり、《我が画室》の隣に、暖炉の前でポーズをとるマドレーヌをデッサンする藤田の写真を並べたりと、見せ方に工夫があつて見応えがあつた。「藤田嗣治が愛したのものたち」については、目黒区立美術館で館蔵展を観た際、藤田の机や鞆なども展示されていて、本展でも《我が画室》に描かれているようなコレクションが展示されているのかと期待したものの、その意味ではちょっと期待外れだった。確かに「猫」も藤田が愛したものには違いないが。

○藤田嗣治に関する企画展は、藤田作品を常設する県立美術館にとって大変重要な柱である。財団所属の学芸員は藤田嗣治を様々な視点から継続して研究しており、その成果は例えば『秋田さきがけ新報』紙上で広く県民に知らされている。この一環に企画展はあり、企画展を拝見する度に新しい藤田嗣治像や藤田作品の重要性への認識が更新されていく。今後も、学芸員の方々の研究成果を具体的に企画展へ反映させていただきたい。

○「パリへの郷愁」は、平野コレクションから、戦前、戦後のパリに関する作品の展示であつた。「秋田の行事」を常設展示している美術館としては、今後も藤田嗣治の画業を紹介、検証していくために必要な展示と感じた。

○今後も、藤田を多面的に学べるテーマで企画していただきたい。平野コレクションを効果的に公開していただければと思う。
○旧県立美術館の構造について、《秋田の行事》に合わせた設定であつたことを学ぶ機会があつても面白いかもしれない。実際に文化創造館へ出向いたり、以前の雰囲気映像を振り返るなど。素晴らしい建物だった。

○企画展(平野コレクション展)の存在が薄いと感じている。その魅力を効果的に発信する宣伝活動を強化できないか。いつでも見られるという印象が強いのだと思うが、展示された作品がなぜ選ばれたのか、また、藤田の制作活動の逸話などで興味を引き出すこともできると思う。

●美術館の基本方針である「平野コレクションの藤田嗣治作品による文化の創造」を念頭に、内容の充実を図ってまいりたい。

●「藤田嗣治が愛したのものたち」展では、《我が画室》に描かれた藤田の収集品の一部を展示した。今後は展示方法なども工夫し、多くの収集品を紹介したいと考えている。

●藤田嗣治と平野政吉による「まぼろしの美術館」構想や、旧県立美術館(現文化創造館)については、これまでも展覧会や取材対応等で取り上げてきたところである。今後も、他施設との連携も視野に入れながら、様々な企画に取り組んでいきたいと考えている。

●広報については、従前からのポスター、チラシ、SNSの効果等を検証し、新たな方策も含めて検討してまいりたい。

② 教育普及事業(セカンドスクール、各種教室等)について

○特に「館長講話 子どもの絵について—小学校低学年のための美術教育—」や「館長によるデッサン・淡彩講座—花を描く—」は、館長のこれまでの研究成果などを有効に活用するものであり、県立美術館の特色にもなる。今後も、他の取り組みと同様に館長による美術館教室を継続していただきたい。

○セカンドスクール利用数は、コロナ禍において、よくここまで回復させたと考えられる。なお、《秋田の行事》以外の藤田嗣治作品の魅力について、学芸員の方々の研究成果を活用し、より各学校にアピールしてほしい。

●子どもたちの情操教育に美術館が果たすべき役割は重要であると考えている。子どもが対象のイベントやワークショップも考えているが、子どもに接する時間が多い保護者や教育関係者の方々に向けて企画しているのが「館長講話 子どもの絵について」である。こうした取組についても、情報がうまく届くよう工夫したい。

<p>○セカンドスクール事業に関しては、昨年同様の数値であり良かったのではないかと思う。ちなみにコロナ前もこのような利用数でしたか？ コロナ前より減少であれば、今後は以前に近い数値となるよう期待する。</p> <p>○コロナの影響もあり、思うように普及事業を組めなかったと思うが、そのなかでも 限られたスタッフで、ワークショップ、コンサート、講演会やギャラリートークなどを行っており、その積極的な取り組み姿勢と努力を評価したい。</p>	<p>●セカンドスクールの利用については、コロナ前と比較しても大きな落ち込みはなかった。コロナ禍になり、昨年度は各学校の遠足や修学旅行先が県内となったことも一因と考えられる。来館してのセカンドスクールが困難な学校には、「出前美術館」という形で対応したこともあった。リモートによるセカンドスクール対応については、今後検討してまいりたい。</p>
<p>○セカンドスクールの利用について、リモート等による鑑賞活動があると有り難い。</p>	
<p>○できる限り、プログラムや活動を増やした方が良い。昨今の学校教育では、美術の授業が少なくなっている。子どもたちの美意識を育むためにも美術館のプログラムは重要だと思う。</p>	

<p>② 県民ギャラリーの利用状況(利用者数、利用促進のための御提案など)について</p>	
<p>○公立美大の学生の発表や、工芸振興協会の展示などは相応の来館者がいるように見える。</p> <p>○県民ギャラリーと美術館の展示ホールの両方のスペースを使うような大型の企画展があれば、さらに来館者が増えるのではないかと。その際にできれば県民ギャラリーに展示する作品は写真撮影が可能なものとし、SNS 等で拡散できればなお望ましい。</p>	<p>●学校や規模の大きな団体などが開催する展示では、広報に力を入れていたり、関連イベント等を開催し、多くの関係者の来場につながっているが、小規模な団体では苦慮しているところもある。「県民ギャラリーで展示をすると、広報面で有利になる」というようなメリットの創出を工夫してまいりたい。</p>
<p>○県民ギャラリーの活用・展示が増えることは、特別展や企画展の入場者増にもつながると考えられるし、秋田県立美術館の必要性への理解推進にも寄与すると考えられる。よって、これまで以上に展示希望者が増えるための何らかの工夫を今後も模索していただきたい。</p>	<p>●例年、同じ時期に利用がある団体に加えて、新規団体に利用を呼びかけてまいりたい。</p> <p>●特別展の規模に応じて、全館展開も検討している。</p>
<p>○令和5年度はコロナの状況も変わっていく。自然と来場者が増えると思うが、利用促進のためには、やはり特別展や企画展の充実に尽きると思う。</p>	<p>●利用者にとって「使いやすい県民ギャラリー」を今後も模索し、美術振興に寄与してまいりたい。</p>
<p>○同じコロナ禍にありながら、県民ギャラリー入場者数・使用日数が現段階で昨年度より半減、特別展での会場使用が今年度少なかったことが要因のようだが、今後の数値増に対する取り組みを期待する。</p>	
<p>○県民ギャラリーが使用されていない時期は寂しく感じる。コロナ禍の影響だと思う。学芸員のおかげで、ギャラリーは年々使いやすくなってきている。シェアギャラリーは良かったと思う。地元の美術の振興は大切な役割だと思う。</p>	

③ その他	
○藤田作品の著作権保護期間内での広報活動は極めて制限が多く、ご担当者のご苦勞には心から同情を申し上げます。	●今後も、多方面からの御協力をいただきながら運営体制や事業の充実を図ってまいります。 ●情報発信におけるインターネットの重要さは強く感じている。権利関係やプライバシーの問題をクリアしつつ活用する方法を検討してまいります。
○県立美術館では職員の方々が、意欲的に、そして誠実に勤務されている。接客態度なども大変好ましい印象を与えてくれる。今後も職員の方々が秋田県美術文化の向上に、自ら積極的に寄与できる職場環境を整えていただきたい。	
○コロナの影響も薄れ人出も戻りつつあるなか、特別展の内容等で入館者数も変動があり運営がなかなか難しいとは思いますが、今後も常設・企画・特別展とバランスのとれた展示内容を望む。	
○宣伝や情報伝達の手段として、インターネットの役割が加速している。アンケート結果を見てもその影響は大きいと感じる。講演会やギャラリートークを YouTube などにのせてはどうか。	

5 総括

良質な美術作品の紹介と啓蒙活動が美術館の役割と捉え、美術のカテゴリーの中から県民に観てもらいたい作品を紹介してきている。そのコンセプトの強弱は、観覧者に押し付けることもなく、かつ齟齬のないよう努めなければならない。今後も皆様のご意見を謙虚に受け止めながら、企画運営に努力いたします。